# 弘前八幡宮の「本多徳治の碑」

村上　亜弥
（青森市民図書館 歴史資料室 職員）

弘前八幡宮（弘前市八幡町1丁目）に「本多徳治の碑」がある。本多徳治（1907～59）は弘前市の新聞社・陸奥新報社の初代社長だ。

本多は油川村（現青森市）生まれで、のちに弘前市へ移った。弘前中学校（現弘前高校）を卒業すると、脇元村（現五所川原市）の脇元尋常高等小学校の代用教員（教員免許状を持たない教員）を経て、1930（昭和5）年に東奥日報社へ入社した。入社にあたっては社会部の竹内俊吉（のちの青森県知事）の推薦があった。

入社の翌年に満州事変が勃発し、弘前市にある第8師団の第4旅団が出動することになると、本多は特派員として従軍した。従軍の経験は『戦線走り書』（1932年）にまとめられている。その後は社会部長や弘前支局長などを務めたが、1946（昭和21）年4月に退社した。

退社後、本多は新しい新聞の発行に向けて準備を進め、1946（昭和21）年9月1日に『陸奥新報』を創刊した。しかし、翌年11月には公職追放を受けて社長を退任している。

新聞業界を離れて食料品店の事務長などを務めた後、青森市に本社を置く東北新聞社（1950年設立）の主筆兼編集局長となった。本多は郷土史家の肴倉弥八に声をかけ、青森市内各町の歴史を紹介する連載を企画した。その連載は好評で『青森市町内盛衰記』（1953年）として出版された。

1953（昭和28）年に株式会社ラジオ青森（現青森放送株式会社、初代社長は竹内）が設立されると、本多は編成課長兼アナウンス課長としてラジオ局の開局準備にあたった。

さらに、放送部長や弘前放送局長などを歴任し、テレビ放送開始に向けて尽力していたが、放送開始3か月前の1959（昭和34）年6月に病気のため亡くなった。葬儀で弔辞を読んだ竹内は「泣けてきてよく読めなかった」という。

1968（昭和43）年6月に本多の友人たちが発起人となり「本多徳治の碑」が建立された。碑の中央に刻まれた「本多徳治の碑」の文字は竹内が揮毫したものである。

また、石碑の台座に埋め込まれたプレートには、本多の経歴などが記されている。その文章は須藤均治が作り、文字は黒滝俊雄（号は大休）が揮毫した。

須藤は東奥日報社や読売新聞社に勤務した後、県内水面漁場管理委員会会長などを務めた人物である。津軽地方の釣り界では「ストキン様」と呼ばれた。一方、黒滝は弘前市の寺院・鳳松院の住職である。洋画家としても活動し、県立弘前工業学校（現弘前工業高校）や浪岡高校などに勤務して美術指導も行った。

須藤によれば弘前中学校には文学や絵や音楽の好きな生徒たちが集まる「仲町組」というグループがあり、本多・須藤・黒滝の3人はそのメンバーだった。黒滝の著書『大休過去帖』（1983年）には「仲町組」の卒業記念写真が掲載されており、3人の姿が確認できる。「本多徳治の碑」は本多を慕う友人たちの思いが込められた石碑といえよう。

本多徳治の碑＝2023（令和5）年9月10日・筆者撮影